

毒本 2017



ノ・ベル研究社

味噌煮込み刑事……………5

不老者……………15

異次元掃除機……………21

勝負の神様……………25

イラスト集……………31

あとがき……………43

味噌煮込み刑事

「今日も朝から味噌煮込みですたい！」

高カロリーな声で男は叫んだ。

「あいよっ！」

カウンターの婆さんも負けじと応答する。この脂ぎったやり取りを見るただけに、毎朝ここ『立ち食いうどん粉竜』こなりゅうにやってくる客も少なくないらしい。

ベッドタウンの駅前ということも手伝ってか、店は繁盛しているようだ。店構え、店内、ともに昭和そのもの。腰の曲がった皺だらけの婆さんが一人で元氣良く客を捌いていく姿はなんとも爽快である。

「味噌煮込み、お待ちイ！」

「つしやああ！ 待ってましたああああ！」

テンションの上がりきった男は勢いよく箸を割り、粉竜自慢の太麺を一気に吸い上げていった。滴り落ちる汗も拭わず、男は一心不乱に麺を吸る。

「うんめええええ！」

毎朝お決まりのガッツポーズも飛び出した。

ここから男のペースは一気に加速する。あつという間に麵を食べ終えるやいなや、器を持ち上げ汁と具を一気飲みし、完食。

「こりや参りましたな。完敗でござるよ」

誰に言うでもなく天井を見上げながら呟き、代金をカウンターに置く。

「ごっそさん！ また明日！」

男は上着を羽織ると足早に店を出た。時間は八時三十一分ジャスト、あと一分で電車がやってくる。

「味噌煮込みパワーマックス全開エンジン！」

他人には決して見えない羽のような物を広げた感覚で、男は全速力で走り去った。

「沢尻さん、ガイシヤの身元が判りました」

沢尻と呼ばれた刑事はゆっくりと振り向いた。その動作、体格、全てに貫禄がみなぎっている。

「名前は生野ホシ、年齢は八十七歳。立ち食いうどん屋経営で、平日の朝八時から夕方七時

まで店を開けていたそうです」

「そうか。この現場、立ち食いうどん粉竜の店長で間違いないんだな？」

「ええ。あと、死亡推定時刻は土曜の夜八時から十二時の間だそうです」

「土曜だと？」

「はい。間違いありません」

沢尻は眉間に深い皺を寄せた。

「よし、付近の聞き込みに行け」

ドスの利いた声で沢尻が指示をすると、部下と思われる男は小走りに駆けていった。

「死因が判明しましたよ、沢尻さん」

現場に待機していた沢尻に向かって、小柄な男はそう告げた。

「腹部からの出血多量によるショック死だそうです」

「……そうか」

沢尻の頭にはすでに犯人像が思い浮かんでいた。血塗りの包丁、調理されたうどんの入っ

た土鍋、土曜日、金庫とレジから盗まれた現金、老舗。ここから導かれる真実はただ一つしかない。だが、一体誰が犯人なのか？

「包丁からガイシャ以外の指紋は出たのか？」

「一人だけ出ましたけど……」

「一致する者なし、か」

「……はい」

このとき沢尻は長丁場を覚悟したが、いつかホシを挙げられる時が来るであろうことを予感していた。